

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520434

研究課題名(和文) 後期中英語の形容詞の語尾の機能と脱落過程

研究課題名(英文) On the Function and the Process of Loss of the Ending -e of Adjectives in Late Middle English

研究代表者 藤原 保明 (FUJIWARA YASUAKI)

聖徳大学・人文学部・教授

研究者番号：30040067

## 研究成果の概要(和文)：

1400年頃の『マンデヴィル旅行記』の3つの写本を対象に、形容詞の語尾 -e を分析した結果、いずれの写字生もこの -e を単数・複数の区別なく、また、語源や過去の屈折の型を問わず、形容詞ごとに有標・無標の語尾を定めていたことが明らかとなった。それゆえ、中英語後期の形容詞の語尾 -e には明確な機能があることから、脱落していたとは言えない。当時の形容詞の語形変化を研究する場合、個々の語形の有標性を確定することは不可欠である。

## 研究成果の概要(英文)：

As a result of the analysis of the three manuscripts of *Mandeville's Travels* in about 1400 AD we found each scribe discriminated between marked and unmarked endings of a given adjective in the positions following its headword, disregarding the difference of the number, the origin, and the pattern of inflection of an adjective in the earlier periods. Hence, contrary to the commonly established view the ending -e is far from being lost in Late Middle English. The markedness condition is indispensable for any promising investigation of morphological diachronic changes of adjectives.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：英語史

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：後期中英語、形容詞、語尾、機能、脱落、マンデヴィル旅行記、有標性、数の区別

## 1. 研究開始当初の背景

This is a pen. ~ These are pens. という英文を見れば、だれでも英語は「数」(number)の区別にこだわる言語であると感じるであろう。すなわち、主語はもとより、述語動詞、冠詞、補語に至るまで、文を構成している語のすべてに数の情報が盛り込まれている。「これはペンです。」～「これらはペンです。」

という日本語と対照させてみると、両言語における数の区別に関わる原則の相違が歴然としてくる。この日本語の場合、数が明示できているのは主語だけである。

ところが、This is a big pen. ~ These are big pens. を見ると、形容詞には数の区別がないことがわかる。そのために、英語の教師や学生の多くは、数の区別へのこだわりが強い英

語において、形容詞に数の区別がないのはなぜかという疑問を抱くが、この疑問に明確な説明ができる者は多くはない。

しかし、英語を時間の流れの中で捉えてみると、形容詞もかつては多様な語尾を伴っていたことがわかる。たとえば、古英語では、形容詞は性・数・格などに応じて多様な語尾を持っていたが、これらの語尾は中英語の末期までに -e まで弱化し、現代英語を見れば明らかなどおり、最終的にすべてが脱落したことになる。もっとも、その多様な語尾が脱落した原因や過程は明確にはなっていない。最後まで脱落に抵抗したのは複数を表す語尾 -e であるが、その背景にどのような言語事情があったのかについて、かねてより興味があり、当時の文献を読み、データを蓄積し、分析方法について検討を重ねていた。

今回、単なる疑問の解消ではなく、学問的に価値のある結果が得られるような分析方法を確立し、長年の懸案が解決できる可能性が出てきたことから、分析と考察を行うことになった。

## 2. 研究の目的

英語の形容詞は、現在は比較変化の場合を除いて、語尾が付加されることは全くあり得ないが、かつてはドイツ語やラテン語のように、名詞の性・数・格や限定的・叙述的という用法の区別、さらには、冠詞などの決定詞が先行するか否かに応じて、付加される語尾の種類は異なっていた。しかし、名詞や代名詞などの屈折の弱化に伴い、形容詞の屈折は衰退し始め、最後まで維持されていた複数を表す語尾 -e も、1400 年頃には脱落したというのが定説になっている。

確かに、今から 600 年ほど前の文献を見ると、gode 'good', riche 'rich', wylde 'wild' などの形容詞は、単数形が -e で終るが、blak 'black', gret 'great', reed 'red' などの形容詞では複数形でも無語尾である。このような例はごく一般的であることから、当時はすでに語尾 -e は数の区別を表す機能を失っていたと結論を下しても、論理的に矛盾することはないように思われる。しかし、一方では、不要になったはずの語尾があえて付加されて残っているという事実は、厳然として存在する。それゆえ、無語尾である現代英語までに無用の語尾を失った原因や過程を明らかにせねばならない。

本研究では、通説とは異なり、1400 年頃の形容詞の語尾 -e は言語的に有意義であり、明確な機能を果たしていたとする立場をとり、その機能とはどのようなものであったかを提示することにある。より具体的には、その機能が書き手に固有のものか、それとも普遍性に富むものかについて明らかにしたい。そのために、いくつかの写本を対象にして、

そこで用いられているすべての形容詞を単数・複数の区別、限定的・叙述的用法の区別、強変化・弱変化活用の区別、および、語源的か非語源的かの区別の観点から分析し、語尾 -e の機能と脱落過程の関係を明らかにしたい。

## 3. 研究の方法

形容詞の屈折語尾は古英語後期から弱化し始めた。そして、13 世紀初頭には、子音で終わる 1 音節語の強変化・単数形は、たとえば、good 'good' のように無語尾となり、その他の場合の語尾は、swete 'sweet' のように -e へと水平化した。この語尾 -e の有無は中英語後期においても概ねこのような原則に基づいていたと言われている。

中英語の形容詞の語尾に関するこのような一般化は広く受け入れられてきたが、疑問点がいくつかある。第一に、形容詞の性・数・格が依存している名詞や決定詞がすでに水平化してしまつた時期に、強変化・弱変化という屈折の型を手がかりにするのは妥当性を欠く。第二に、古英語の形容詞のうち、子音で終わる 1 音節語の強変化・単数形だけに語尾 -e が付加されると考える根拠が明確ではない。第三に、語尾 -e が脱落する過程で生じる語尾には「一般化」に反するものがあるが、これらの語尾に言語学的意義があるのかないのか不明確である。

そこで、本研究では、最初に従来の「一般化」の妥当性を検証することにした。Kerkhof (1966) によれば、韻文が主であるチョーサーの作品では、「一般化」は概ね当てはまるようである。しかし、韻律の関与がない散文における形容詞の語尾 -e の機能を明確にするのがより重要であることから、本研究では、チョーサーとほぼ同時代の散文である『マンデヴィル旅行記』（コットン版、ボドレー版、欠損版）を分析の対象とした。ちなみに、Minkova (1991) は語尾 -e は 1400 年頃までにイギリスのすべての地域で脱落したと述べているが、今回分析対象とした文献はその主張の妥当性の検証にもなり得る。

なお、分析結果を考察しながら、研究方法の手直しや新たな分析枠の設定を行うことがありうるので、研究方法の詳細は次の研究成果に盛り込むことにした。

## 4. 研究成果

最初に、コットン版で用いられているすべての形容詞を対象に、語源と語尾 -e の関係を明らかにした。その結果、古英語で -e で終る 2 音節の large 'large', riche 'rich', swete 'sweet' などは、規則的に語尾 -e を伴うことから、語源に忠実であり、「一般化」に反していない。ところが、古英語で無語尾であった、holy 'holy', mighty 'mighty', worthi

‘worthy’などは、規則的に無語尾である点は語源に忠実であるが、複数形が -e で終わらない点は明らかに「一般化」に反している。ちなみに、コットン版では、litille ‘little’, gode ‘good’, white ‘white’のように、古英語で無語尾の形容詞はほとんどすべて非語源的な語尾 -e で終わっていることから、「一般化」に反している。それゆえ、語源と音節数は少なくとも語尾 -e の脱落と付加に關与する要因の解明には役立たないことになる。

そこで、新たな分析枠が必要となるが、本研究では、単数・複数という数の区別と、限定的・叙述的という用法上の区別のみを基準にして分析を試みた。具体的には、語尾 -e の有無と頻度数の相違に基づく有標性を手がかりにして、形容詞の類型化を試みることである。単数・複数共に -e で終る場合を A 型、単数・複数共に無語尾の場合を B 型、単数は無語尾、複数は -e で終わる場合を C 型とすると、A 型と C 型はほぼ均等な割合で生じ、全体の 75% を占めるが、B 型は全体の 25% にすぎないことから、語尾 -e は全体としては、「複数性」(plurality) の標識として機能していた確率が高いことになる。

次に、用法上の区別については、叙述用法は該当例が少なく、有意な一般化は不可能であることが判明したことから、限定用法の例から情報を引き出すことにした。とりわけ興味深いのは、限定用法には主要語の前という「無標の位置」と、主要語の後という「有標の位置」の区別があり、この区別が語尾 -e の有無と密接な関わりがあることがわかった。すなわち、個々の形容詞の限定用法のうち、単数形と複数形のそれぞれについて、頻度数の多い語形を無標、少ない語形を有標と定めると、有標の語形は主要語の後という有標の位置には決して生じないことがわかった。たとえば、fair ‘fair’ の場合、単数形が -e で終る有標の例は、89 例中 33 例 (37.01%) を占めるにもかかわらず、この有標の形式は主要語の後には全く生じない。一方、単数の無標の形式である fair は、a gode sight to beholde and a fair ‘a good sight to behold and a fair’ のように、主要語の後にごく普通に生じる。

そこで、「形容詞の有標の形式は主要語の後という有標の位置を占めることはできない」という作業仮説を設定して、頻度数の多い他の形容詞 (gode ‘good’, gret ‘great’, litille ‘little’, riche ‘rich’, holy ‘holy’, right ‘right’, strong ‘strong’, long ‘long’) について分析したところ、いずれもこの仮説どおりの結果が得られた。ボドレー版の場合には、使用頻度数が多く、有意な一般化が見込まれる gret ‘great’, fayr ‘fair’, good ‘good’, dyuers ‘diverse’, holy ‘holy’, long ‘long’, riche ‘rich’, precious ‘precious’, yong ‘young’, high ‘high’

という形容詞が 10 例、欠損版については、grete ‘great’, good ‘good’, faire ‘fair’, christen ‘Christian’, long ‘long’, holy ‘holy’, precious ‘precious’, dyuerse ‘diverse’, riche ‘rich’, white ‘white’ の 10 種類の形容詞をそれぞれ対象にして、全く同様の基準で分析を行った。3 写本とも生起頻度数の多い順に抽出された 10 種類の形容詞は大半が同一であったが、すべてが同じというわけではなかった。しかし、分析の結果、仮説に反する例は全く生じないことがわかり、仮説の正しさは検証された。ちなみに、brode ‘broad’, delitable ‘delightful’, locable ‘praiseworthy’, myghti ‘mighty’, narwe ‘narrow’, noble ‘noble’, plenteuous ‘plentiful’, trewe ‘true’ などの形容詞は生起頻度が低いために、有標か無標かの判断が不可能であるが、これらの形式はいずれも主要語の後位置に生じることから、すべて無標の形式であるとみなせる。すなわち、本研究で設定された仮説は与えられた形容詞の語形の有標性の判断基準としても利用できることがわかる。

分析対象とした 3 つの写本はいずれも 1400 年頃に書かれたものであるが、写字生はそれぞれ異なり、典拠とした文献もフランス語またはラテン語で書かれていて、それぞれ独自の立場で、別々の場所と時期に英語に訳したはずである。個々の形容詞には単数・複数の区別と、限定的・叙述的という用法の区別があり、写字生はそれぞれ独自に語尾 -e の付加の有無を判断し、有標・無標の区別をしている。にもかかわらず、限定用法の場合、主要語の後には有標の語形を一切使用しないということは、写字生たちは全員、語尾 -e を無原則に付加したり削除していたのではないことを如実に示している。それゆえ、このような語尾 -e に何らの言語的機能を認めず、脱落寸前であったとみなすことはできない。要するに、Minkova などの説とは逆に、1400 年頃の英語の形容詞の語尾は水平化されて -e になっていたとはいえ、脱落することはなく、言語的に有意な機能を果たしていたと結論できる。

今回の仮説はチョーサーの『カンタベリー物語』のような韻文の分析にも有効かどうか興味深いのが、目下分析中であるので、結果は別途公表する予定である。

以上の分析結果をまとめると、対象とした 3 つの写本 (コットン版、ボドレー版、欠損版) とも、形容詞の語尾 -e の有無は一見したところきわめて恣意的であるように思われるが、どの形容詞も限定する名詞 (= 主要語) の前という無標の位置には、無標・有標いずれの語尾も生じるが、名詞の後という有標の位置には有標の語尾は全く生じない。それゆえ、「形容詞の無標の語形は有標の位置を占めることはできない」という仮説を設定

した。形容詞の語形と統語上のこの仮説は、3つの写本のすべてに適用でき、しかも、すべての形容詞に当てはまるものが検証された。いずれの写字生も語尾 -e をきわめて明確な根拠に基づいて用いていることから、1400年頃は、形容詞の語尾 -e は脱落したことにはならない。

この結果は、通説を完全に否定するのみならず、変化の過程にある語形の言語学的意義を明らかにする場合、豊富なデータが得られる文献を対象とすることは言うに及ばず、有意な結果を導くためには信頼のおける分析方法の確立がいかに大切であるかを実証するものとなっている。ちなみに、ほぼ同時期の韻文の代表作であるチョーサーの『カンタベリー物語』においては、形容詞のみならず、名詞やその他の品詞の語尾 -e の音価の推定は古くからある懸案であるが、脚韻のみならず、今回用いた有標性の尺度を活用すれば、新たな事実の指摘ができる可能性が高い。その意味においても、今回の分析方法と結果は大きな成果であると言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

- ① 藤原保明、欠損版『マンデヴィル旅行記』の形容詞の語尾について、聖徳大学研究紀要、査読有、21巻、2011年、117-124
- ② Fujiwara, Yasuaki, Prosodic Constraints on Old English Alliteration, The Development of the Anglo-Saxon Language and Linguistic Universals, 査読有、2巻、2010年、111-124
- ③ 藤原保明、ボドレー版『マンデヴィル旅行記』における形容詞の語尾について、聖徳大学研究紀要、査読有、20巻、2010年、87-94
- ④ 藤原保明、英語のリズムと表記：共時的・通時的観点から、EPTA BULLETIN、査読有、6巻、2009年、1-23
- ⑤ Fujiwara, Yasuaki, On the Function of *That* of Complex Conjunctions in Late Middle English, Tsukuba English Studies, 査読有、27巻、2009年、1-11
- ⑥ 藤原保明、中英語後期における形容詞の語尾 -e の機能について、JELS (日本英語学会研究発表論文集)、査読有、26巻、2009年、51-60
- ⑦ Fujiwara, Yasuaki, Old English Pronouns for Possession, The Development of the Anglo-Saxon Language and Linguistic Universals, 査読有、1巻、2009年、69-82

[学会発表] (計4件)

- ① 藤原保明、there 構文の史的発達、近代英語協会第27回大会、2010年5月27日、京都大学
- ② 藤原保明、1の脱落と定式化について、英語発音・表記学会第15回大会、2010年7月3日、茨城キリスト教大学
- ③ 藤原保明、英語の Stress Group と Rhythm Unit の通時的・共時的研究、英語発音・表記学会第14回大会、2009年7月4日、茨城キリスト教大学
- ④ 藤原保明、中英語後期における形容詞の語尾 -e の機能について、日本英語学会第26回大会、2008年11月15日、筑波大学

[図書] (計1件)

- ① 藤原保明、開拓社、『言葉をさかのぼる：歴史に閉ざされた英語と日本語の世界』、2010年、224

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
藤原 保明 (FUJIWARA YASUAKI)  
聖徳大学・人文学部・教授  
研究者番号：30040067

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし